

大学選びの 視点

第2回

卒業後の進路



このシリーズでは、高校生が志望大学を考えるときに、どのような情報を提供し、指導に活かしていくのか、高校の先生方へのインタビューやアンケートの結果などを中心に紹介していく。

今回のテーマは「卒業後の進路」である。これには、就職率、産業別・職業別就職者数、就職先の企業名、大学院等への進学率、進学先の大学院名、国家資格取得状況などが含まれる。ガイドライン読者対象アンケート等を見ると、「大学選びの視点」として、「入学者選抜に関する情報」に次いで注目する先生が多く、大学による公表も進んでいる。しかし、数値情報を見

る際には、算出方法などに注意する必要がある。また、数値だけでなく、就職課・キャリアセンターによる就職支援の取り組みや、卒業生の就職活動や就職後の活躍の様子なども参考になるだろう。

こうした卒業後の進路に関する情報の見方や、指導での活用方法について、アンケートで寄せられたコメントを紹介する。さらに、アンケートにご協力いただいた先生のうち、2名の先生に、具体的にどのような点に注目しているか、生徒指導の際にどのように活用しているかなどをインタビューした。

ガイドライン編集部では、高校の先生方が大学卒業後の進路に関する情報をどのように進路指導に活用しているか聞かため、ガイドラインモニターの先生方や「ひらく 日本の大学」データベースを活用いただいている先生方にアンケートを実施した。回答内容から、先生方のコメントを紹介する。

情報から進路の傾向を読み取る

- ▶卒業後の進路状況は必ずチェックするようにさせています。社会への即戦力としてのニーズなのか、修士・博士課程に進み研究をさらに深めてゆくことを求めているのか、といった大学の求める人材像がわかるからです。そうした情報を確認することで、生徒のミスマッチをある程度防止できていると思っています。
- ▶管理栄養士養成系の大学を考えると、合格率や合格者数を参考にして選ぶように助言しています。入試の偏差値だけでなく、出口情報を見ることで選択の手がかりになると思います。
- ▶実学志向、資格志向が高まってきているが、資格取得がそ

のまま就職に結びつくわけではないので、資格を活かして就職ができているかどうかはしっかり調べるように指導している。

情報の見方に注意する

- ▶大学からの就職先情報はとても重要です。しかし、一般職と総合職を区別せずに公表していたり、教員でいうと臨時的任用を含めて教員採用数にカウントしている場合があるため、注意が必要だと感じています。
- ▶最近、卒業後の進路は生徒のみならず保護者も非常に関心を持っているので、志望校調査などには就職率などを調べて記入する欄を作っています。調べさせるときには、その数字の真偽を感じさせることと、数字だけで判断しないように注意させています。
- ▶就職率については、大学がホームページ等で公表する数値を鵜呑みにするのではなく、「進路決定者／卒業生総数」を見るように促している。できれば、「進路決定者／入学生総数」まで追跡させている。国家試験合格の実態が見えにくい学校もあるので、一緒にホームページを見るな

ど、丁寧に検討させている。

- ▶割合で出される数字については、「分母」と「分子」をきちんと把握する必要がある。教員養成系大学卒業者の教員への就職率については、「教員就職希望者」が何人いるのかによっても評価が変わるので、卒業者数と合わせて公表してほしい。こういった点については、生徒がオープンキャンパスや大学案内などで情報を得る際にも気を付けなければならないことを指導している。
- ▶教員養成系大学・学部志望者には、正規採用と臨時的任用で区別した卒業者の人数・比率および正規採用に向けて各大学で方策を練っているものはないか、等についてもわかる範囲で知らせ、または調べるよう伝えています。
- ▶生徒たちは、「就職先」に目が行くが、注目するのは大手企業ばかりである。しかし、実際には限られた人数しか就職できないのであり、その大学に入ったからその企業に就職できるわけではないと言っている。

- ▶就職先の企業名は、年度ごとに企業別の人数を公表している場合もあれば、「主な就職先」として、数年分の実績を抜粋し、有名な企業を中心に公表している場合もある。生徒が大学のホームページ等を見る際には、その点に注意するよう伝えている。

学生の声なども合わせて参考にする

- ▶卒業後の進路に関する数値情報はホームページを見るときに参考にする程度です。数字はもちろん大切ですが、そこにいた大学生の苦労話（内定をもらうまで何社受けたかなど）があると参考になります。
- ▶割合などの数値情報はあまり重視していません。自分の学校から進学した生徒のデータこそが受験をする後輩たちの貴重な参考資料になるという発想から、できるだけ大学の担当者には、卒業生のその後を問うことにしています。

Interview 1

高校の先生に聞く、進路指導での 大学卒業後の進路情報の活用

明星学園高等学校 石井孝先生

卒業後の進路などに関する数値情報は 大学教育の状況と合わせて確認を

本校は自由な校風の高校で、偏差値だけで大学選びをしないよう、以前から指導してきました。

現在、大学はホームページやパンフレットを通じて、さまざまな情報を公表しています。そして生徒には、人づてではなく、自分で調べるように指導しています。その際、どうしても仕方がない面もあるのですが、多くの情報は良い面を強調して公表する傾向があるため、情報をさまざまな方法を用いて確認させ、入学後に自分のイメージとは違っていたということにならないようにと注意しています。

特に、卒業後の進路などに関する数値情報には注意させています。例えば、公表されている国家試験の合格率はどの大学も非常に高い数値になっています。その一方で留年者の数もかなりの割合になっている場合もあります。進路未決定の卒業生の割合が低い大学も、卒業後の進路を見ると、他大学と比較して大学院への進学割合が高い場合があります。生徒が大学院進学を望んでいればよいのですが、そうでなければ大学卒業後をイメージしにくくなります。

ですから、大学の教育の状況と合わせて判断する必要があるのです。

そうした判断の材料とするため、就職率や国家試験合格率と併せて、各学年の在籍者数の動きが大きい場合、その主な理由を知ることができれば、正確に生徒は、大学

入学後をイメージできるのではないかと考えています。

留年や中退については、大学での学びについていけない、大学の教育・研究内容と本人の志望が合っていなかった、授業を受ける環境が思っていたものと違ったなど、学生によって理由は異なります。大学に非がない場合も多くありますので、数値だけでは判断できないのです。同じ大学でも学部・学科によって大きく異なる場合もあるようですので、きめ細かな情報が必要だと思えます。

また、学生の意見は一面的なものですから、注意すべきですが、教育の状況については、在学生に聞いてみるのは有効な手段だと考えています。

学生の学ぶ環境をどのように読み取るか

そうしたさまざまな情報を参考にして、生徒にアドバイスしていますが、私が大学選びの際に最も重視しているのは、学ぶ環境が整っているかどうかです。そのため、近年は以前に比べて、大学の入試状況も重視しています。

入試難易度を見ると同じ基準で大学を比較できるからという理由もありますが、一定の競争率をもって入試を行っている大学は、意欲が高い学生が多く、学ぶ姿勢ができていくことが多いからです。その一方で、合格しやすい大学であっても、学生の意欲を高め、質の高い教育を成立させている大学も多くあります。そのような大学は、生徒や保護者の関心も高いため、どのように見つけ出せるようにしていくかが、今後の課題だと感じています。

あまり重視しない

- ▶就職率や就職先等は情報として一緒に調べますが、大きなウェイトを占めることはありません。どの大学に入っても自分が一生懸命やらなければ意味がないので。
- ▶データはあくまでデータ、目安と考えさせている。同じような目標のある人がいると自分を鼓舞できる生徒には、勧

める。そうでない生徒には、目標実現のための学習を促すほうが良いと思う。

- ▶就職率や国家試験合格率などの情報も見ますが、大学はおそらく落ち着いて勉強する最後の機会だと考えています。大学4年間を就職予備校としてではなく、たとえ研究者にならなくても学部・学科で学んだことを深く探究することの重要性を生徒に伝えています。

Interview 2

高校の先生に聞く、進路指導での 大学卒業後の進路情報の活用

栃木県立佐野東高等学校 須永恵二先生

入学者数に対する国家試験合格率を算出 大学訪問の際はキャリアセンターに注目

現在、大学はさまざまな情報を公表していますが、その情報の中で私が重視することは、その情報から卒業後の進路をどれだけ具体的にイメージできるか、という点です。

各大学の就職率・進学率や、職業別・産業別の就職者数などは、大学がホームページやパンフレットで公表しています。出版社や予備校がまとめる情報誌等でも確認できるようになりました。しかし、現場の進路指導においては、もう少し踏み込んだ情報が必要な場合が多いのです。例えば、具体的な企業名とその企業での職種等です。教員採用試験であれば、正規採用の人数、講師採用の人数ということになります。大学側としては思わしくない数値や状況であっても、年度ごとに具体的な情報をしっかり寄せてくれる大学は本当に信頼が持てます。

国家試験の合格率については特に注意をしています。大学から公表される合格率は、受験者数に対する合格者数の割合がほとんどで、特に専門性の高い学部学科、例えば、薬学を含む看護・医療系の学部・学科等においては、「受験者数に対する割合」ではなく、「入学者数に対する割合」が、学部・学科内部の状況把握という面でとても重要な数値となります。私は、進学希望者がいる大学に、入学者数と国家試験の合格者数を問い合わせ、入学者に対する合格率を算出し、生徒の進路指導の資料としています。大学選びの際、国家試験合格率を重要な判断基準とする生徒は多いのですが、どのぐらいの学生が受験しているのかまで考える生徒は少ないようです。

希望する進路を実現するためには、大学の支援体制も重要です。そこで、私は大学を訪問する際には、まず初めに就職課・キャリアセンターを必ず見学するようにしています。求人票や卒業生の就職に関する資料等が豊富に揃っているか、利用しやすく整理されているか、アドバイザーが常駐しているか、実際に学生が施設を利用しているか、などに注目しています。生徒にも、オープンキャンパス等で大学に行くときは、まず、就職課・キャリアセンター等の施設・設備が充実しているかどうか、しっかり見学しないと指導しています。

大学の学生支援に注目すると同時に 体系的なキャリア教育を行いミスマッチを防ぐ

私が現在の進路指導の最大の課題と感じているのは、ミスマッチによる「中退」です。大学によっては、担任制を採用し、成績不振の学生の履修指導や、欠席しがちの生徒への生活指導など、中退や留年を防ぐ努力をされていますが、中退問題については高校の進路指導の影響が大きいと感じています。

本校では「中退をしない進路を選ばせる」ことをテーマとし、大学卒業後にどのような仕事に就きたいかを考え、そこから逆算して学部・学科・大学選びをするよう、体系的なキャリア教育「キャリアプロジェクト 啓(けい)」(3カ年計画)を行っています。毎週1時間活用し、この時間を軸に、22分野のゼミ(法学・政治学、経済・経営・商学等)に分かれ興味分野の調査・研究を行います。職業調べ、大学・学部・学科調べ、大学・企業訪問、大学教員の出張講義、研究室訪問等を通じて、大学進学後の姿を具体的にイメージし、大学に対する疑問やイメージの違いを高校生うちに解消することで、進学先とのミスマッチを防ぐことに努力しています。

中退などの問題は、大学の努力と高校の努力が合わさって、初めて解決するものです。そうした意味でも、今後は大学と高校の連携、すなわち高大連携がますます重要になると思います。

最近では、就職・進学先だけでなく、単位取得状況や成績、生活状況まで報告してくれる大学が増えています。中には、高校在籍時の評定平均と結びつけた表まで作成してくれる大学もあります。そうしたデータを見ると、本校の卒業生の様子や、大学進学後の成長を知ることができるため、信頼して生徒を送り出すことができます。

大学の情報公表にはもっと要求したいこともあります。以前と比べれば、ずっと協力的で努力されていることは間違いありません。高校教員も卒業生の様子を進学先の大学に見に行くなど、大学との情報共有に努められるとよいと思います。そうしたことを通じて、一人ひとりの生徒にとって、より良い進路を考えられる状況を整えていくことが重要であると思います。